

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 染谷昌義

染谷昌義氏の論文「知覚経験のエコロジー」は、J・J・ギブソンの生態学的心理学のもつ哲学的意義とその射程を、特にその存在論と認識論に関して検討したものである。

伝統的な知覚論の見方のもとでは、知覚的認知の成立に関する基本問題は、環境から与えられたわずかな刺激をもとにして、いかにして環境に関する認知を獲得できるかという点に見出されてきた。そのために、答えはもっぱら知覚者の内部で行われるさまざまな活動、すなわち、与えられた表象に基づいてなされる判断、推論、計算、あるいは情報処理と呼ばれる操作のあり方に求められてきた。

それに対して、ギブソンを創始者とする生態学的アプローチでは、伝統的な知覚論の前提が根本的に変換され、知覚の可能性の条件は知覚者の内部に見出されるのではなく、外部に見出される。つまりここでは、知覚的認知の基本問題は、環境の性質、媒質内の情報、そして知覚者の身体活動のあり方を解明することにおかれる。こうした見方のもとで、環境には、知覚者が生きる上で重要な意味を持つ性質（アフォーダンス）が備わっており、また、媒質の光のなかにはそれらに対応する情報が満ちていることが指摘され、されに、知覚者は、さまざまな身体活動を通して、そうした情報を抽出（ピックアップ）することによって環境に備わるアフォーダンスの認知を成し遂げているとみなされる。こうして、アフォーダンスの実在性というテーゼをはじめ、表象を媒介しない直接知覚という考え方や、知覚と身体的行為との密接な連関といった考え方など、さまざまな新たな見方が提起されることになる。

染谷さんの博士論文は、こうした特徴を持つ生態学的アプローチを近代認識論の問題領域全体に適用して、その有効性を論じたものである。

論文は全体として、3部に分かれている。

第1部「知覚経験のエコロジーとは」では、おもにギブソンの著作を基にして、生態学的アプローチの基本構図がまとめて提示される。環境の基本的な存在論的構造、生態光学に基く情報のあり方、そして、アフォーダンスの直接知覚説が環境知覚と自己知覚の相補性を通して描かれる。

第2部では、アフォーダンスの実在性というテーゼが、さまざまな批判に答える形で擁護される。とりわけ染谷さんの独創性が現れているのは、アフォーダンスの存在に関する「資源解釈」が提出される場所である。アフォーダンスは、知覚者の行為のあり方やその存在と相関的な性質とみなされているため、その存在に関しては、一種の関係性の性質とみなす関係解釈や、あるいは、一種の潜在的性質とみなす傾向性解釈がおもになされてきた。それに対して、染谷さんは、アフォーダンスは、知覚者によって利用される前から、知覚

者の存在とは独立にあらかじめ「資源」のような仕方で存在しているという見方を提起して、説得的に論じている。この点で、染谷さんのアフォーダンスの解釈はもっとも実在論的傾向のつよいものとなっている。他方で、染谷さんは、人間があらかじめ存在するアフォーダンスに働きかけて新しい環境を形成するものであることも強調し、それによって、環境が、文化的、社会的な構造を持つようになることも強調している。こうして、人間の知覚と行為に結びついた活動から、言語コミュニケーションのような「高次の活動」に到るまで、それらは環境存在論のなかに位置を与えられることになる。

認識問題が扱われる第3部では、直接知覚説への反論となると思われるさまざまな議論や事例が取り上げられ、それに対して大変詳細な仕方での応答が試みられる。

知覚が表象に媒介される認知活動であるという間接説を支持するために持ち出される代表的な議論は、誤った知覚を事例とした錯覚論法である。誤った知覚には対象が対応しないため、表象を持ち出さないと説明がつかないと思われるからである。染谷さんは、錯覚論法を単に論理的に批判するのではなく、幾何学的錯視から幻覚、あるいは、見間違いに至るまで、さまざまな具体例を一つひとつ取り上げて、それらが誤った知覚とみなされる必要はなく、むしろ、不完全な知覚ないし、知覚の完成には到達していない失敗例と解釈しなおすことができることを示す。このような詳細な議論によって、錯覚論法に用いられる事例を理解するために「誤った知覚」という概念を用いる必要のないことが示され、表象を考えなくなる誘惑から自由になりうる可能性が示されることになる。心理学の知見などを十二分に利用したこのような議論を展開することによって、染谷さんは、認識論を「自然化」するということがどういうことかを見事に示して見せたといえるだろう。

最後に、おもにプラグマティストのジェームスの見方を利用して、知覚と概念の関係のあり方を論ずることによって、生態学的アプローチのなかに概念的認知を導入する可能性を示し、それによってさらに、認識の知覚的な正当化に関する興味深い解釈を提示している。以上のように、染谷さんは本論文の中心である第2部と第3部のなかで、これまでの論者には見られない徹底さで、存在論と認識論の基本問題に関して生態学的観点を擁護する議論を展開している。

審査委員会では、染谷さんの議論のなかでは、必ずしも伝統的な見方のなかで論じられてきた問題に十分考慮が払われていないのではないかと、そのために、染谷さんの議論は、生態学的アプローチをとらない論者に対して必ずしも十分説得力を持たないのではないかと、という批判や、さらには、社会的制度のようなものにもアフォーダンスの資源解釈や直接知覚説が成り立つのかどうか、といった疑問が提出された。こうした論点に関してはまだまだ論ずべき点が残っていることは確認された。しかし、本論文のように議論の幅の広さと徹底さをもって、生態学的アプローチの哲学的意義を検討したものは日本はもとより外国でも見かけないものであり、十分博士論文の資格を有していると考えられる点に関しては、審査委員全員の一致するところであった

したがって、本審査委員会は染谷さんの論文は博士（学術）の学位を授与されるにふさわ

しい論文と判断するものである。